

言語と記号（四）

—— 近代範疇論の展開 ——

中 島 聰・栗 栖 照 雄*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*岡山理科大学非常勤講師

(1997年10月6日 受理)

I

西洋《近代哲学》は一般に、デカルトが《コギト》(cogito 私は考える)をもって形而上学の定礎となしたことに始まるとされている。そのコギトは、ルネサンスと宗教改革の運動を発動せしめた古典古代の《数学的精神》の再覚醒と、その精神の自然に対する実験的な投企を伴う新たな知の様式を、知自らの内的要求に発して基礎付ける努力の中から発見されたものである。その投企の主役を演じたのが、《科学革命》の三人の担い手、ガリレオ、デカルト、ニュートンであった。彼らによって《数学的精神》は次第に現実的な力を身につけつつ、その固有の活動能力を新たな知として自覚してゆくのである。その新たな知とは、他ならない、知自らが自らの権利と権利の限界を明確にし、かくして自らの成立の確固たる根拠を定めるところの知なのである。それは、《数学的精神》そのものが最初から保有していた遺産の、知における無制約的な展開に他ならない。この展開によって、西洋の学知の領域に《理性》(ratio)という精神領域が定着することとなる。この《理性》は、デカルトがコギトという《絶対・不動の基礎》をあてがうことによって、新たに存在者全体(人間・自然・神)に対する攻撃的な知的能力が保証された。その保証に基づいて、実際に存在者全体を理性によって形而上学的に統一する思想を構築したのが、スピノザとライプニッツであった。さらにその思想を、学問的(学校的)に普及せしめる作業がヴォルフなどによって進められると同時に、社会と人間を実践的に理性化する運動が、《啓蒙》という呼び名でフランスを中心にして展開する。ここに西洋において、いわゆる《理性的動物》(animal rationale)という近代の人間像が実現することになるのである¹⁾。

こうした《理性》形成の伝統を真っ正面から受け継いで、理性の理論的・実践的活動の真の条件と制約を、《理性批判》という形でその権利に関して究明しようとしたのがカントである。カントの理性批判は、最終的には、《理性的動物》としての人間の知(自然)と道徳(人間の魂=心理)と宗教(神・信仰)の可能的根拠を明らかにして、《人間とは何であるか》という《人間学》の体系形成を構想したものであった。そしてその準備として着始された彼の理性批判は、理性の認識能力を、学的知における《表象》や《意識》の《経験》

の可能性の制約に関して明確にすることによって、限界づけようとするものである。その作業の全体が《先験的哲学》と称された。《先験的》(transzendental) [超越論的とも訳される]という言葉は、主語と述語の結合である命題形成(=判断)として発生する《経験》=《基礎付けられた認識》の論理的制約を“超えて”，その命題が指向する対象(客観)と論理的制約の関係を問題にする、一つの反省的態度の性格を意味している。そしてカントが、この《経験》に対する反省的態度において差当り究明の中心においたものが、《カテゴリー=純粹悟性概念》の演繹という作業である。この演繹の作業は、命題の内部にとどまって主語と述語の論理的関係の分析にその真理性の最も深い根拠を置こうとする伝統的論理学そのものものと、その論理によって構成される命題体系としての伝統的形而上学の、さらにその根拠を解明せんとするものであった。伝統的論理学は結局、矛盾律(主語に内在しないものは述語としてはならない)に全体の基礎を置くことになる。この矛盾律は《分析判断》には絶対的に妥当するが、対象(客観)へと超え出てゆく《総合判断》に対しては絶対的に妥当するとは限らない。ところが《分析判断》の、したがって伝統的論理学の発生的根拠でもある人間的《経験》の本体は、自然的、学的、形而上学的と問わず《総合判断》にある。カントは、この《総合判断》に対するカテゴリーの適用の制約を考察するのである。その考察は、《アприオリな総合判断》の可能性を問うこともってはじまり、《経験の可能性の制約は、同時に経験の対象の可能性の制約である》という《最高原則》の導出をもって、一応の問題構造的解決がなされる。したがってこの場合カテゴリーは、一方で純粹に論理形式的関係に妥当するものとしてだけでなく、論理形式関係がその内実を獲得する対象との関係にも、すなわち《経験》にも本質的に妥当するもの、否、後者の側に本質的に妥当するもの、として扱われる。後者が本質的であるというのは、カテゴリーが単に論理的关系の内実が獲得される(与えられる)ことを可能にするだけでなく、むしろ論理そのものをも構成する機能を有しているからである。ここにカントのカテゴリー論の興行と困難さが潜んでいる。そしてこの興行と困難さが、現在に至るまでの近代哲学の課題として、多くの後継者の考察テーマとして残ることになるのである²⁾。

II

カントの後、紆余曲折を経ながらカテゴリー論は、メインテーマかサブテーマかのどちらにしても、常に哲学においては、主として認識論という形態において、大きな負担を研究者にかけてきたのである。この問題を避けたヘーゲル学派の否定的な見解が支配した後、あらためて新カント学派がそうした負担をそれなりに引き受けて、カテゴリー論をメインテーマとする理説を展開した。しかし、《生の哲学》という理性的形而上学の転倒形態が生み出される時代の趨勢にも影響されて、そこから多様な形而上学的思想が案出されはしたが、真にカントの思惟の深みに到達するカテゴリー論が登場することはなかった。そうした中で、カントのカテゴリー論の根源性に比肩しうる考察が生まれるのである。その考

察を遂行したのがフッサールである。

フッサールのカテゴリー論を理解するためには、カントのそれがそうであったように、カテゴリー論が展開する次元・エレメントを正しく把握する必要がある、否、把握するのではなく、自らがそのエレメントの中に身を移し入れる必要がある。ところが、カントの場合、終生ほぼ一貫してカテゴリー論は一定のエレメント（先験的哲学）の中に根を下ろし、しかも一定の理解と位置付けを維持していたと言ってよいのであるが、フッサールの場合には、カテゴリー論は、彼の哲学研究がそのエレメントを微妙に変えるのに応じて、やはり理解と位置付けが変化するのが余儀なくされるのである。たしかに彼の場合、研究の最初から《カテゴリー》という術語が登場する。しかしその術語の意味は、その術語によって指示される研究目標が研究過程の各局面において進行し、研究の照準と領域がずれてゆくにしたがって、複雑に変化してゆくのである。その変化は、意識における《直観》の地位に関するフッサールの理解に原因がある。そしてそれは、そうした研究目標や研究の照準・領域の前後関係と重層関係と相俟って、彼の論文を読むもの到大変な苦渋を強いられるものとなっている。この事情は、一個カテゴリーの問題に限らず、彼の研究において言表される重要な概念のほとんどについて当てはまると言っても過言ではない。そもそも《現象学》という概念すら、その例に漏れないくらいである。そうした流動変化する術語や概念の中でも《カテゴリー》は、その最も典型的な例である。それゆえにこそ、彼のカテゴリー論の理解には、他にも増してその論究されるエレメントを、むしろエレメントこそを先に把握する必要があるのである。ところが彼のそのエレメントは、彼の著作全体の内的に変動する流れに沿って、広範に広がっている。したがって彼の研究のエレメントを正しく把握するためには、動かない澱みの中に身を置くのではなく、彼と共にその流れに身を任せて、その流れが作り出す渦の中にも身を沈めなければならない。それというのも、彼の渦なすエレメントの流れこそ、現代の哲学的研究と論理学的研究（これには現代の言語学的研究も含まれる）の各々の問題全体と、相互の間に横たわる関係の問題全体がそれ自身の源とするものだからである。現代こうした哲学と論理学（言語学）の両分野にまたがる全体的研究は、それぞれの個別的問題領域においてはそれなりに維持されているとはいえ、全体的な問題としての研究は停滞していると言わざるを得ない。その停滞から脱するためには、何はともあれ、問題が進行する流れをもう一度解き放つ必要があろう。そのためには、そうした流れをなおその著作の中に封じ込めているフッサールの研究作業の全体を見て行くことは、決して無駄ではないであろう。そしてそうした意味での、すなわち哲学的研究（フッサールの場合は《現象学的研究》）と論理学的研究（フッサールの場合は《純粹論理学研究》）の両分野にわたる流れを、最も顕著に告示している概念が《カテゴリー》だと言える。彼が《カテゴリー》にこだわり続けた理由は他でもなく、カントがそうであったように、西洋における学知の伝統、すなわち数学的精神の展開から発生した《理性》本質に基づく知と経験から、その研究の重力を受けていたからである。そこで彼の著

作の順序に合わせて、彼の《カテゴリー》理解の変遷の流れを見て行くことにする。

フッサールの研究全体の流れの方向を眺望するために、先ず彼の著作名と出版年を表示しておこう。

1887年：『数の概念について』（1891年に『算術の哲学』として出版）

1900年：『論理的諸研究』第一巻（『論研』1と略記）

1901年：『論理的諸研究』第二巻（『論研』2と略記）

1907年：『現象学の理念』（『理念』と略記）

1911年：『厳密な学としての哲学』（『厳密』と略記）

1913年：『純粹現象学と現象学的哲学の諸構想』（『イデー』と略記）

1928年：『内的時間意識の現象学についての講義』（『時間意識』と略記）

1929年：『形式論理学と先験的論理学』（『形式論理学』と略記）

1929年：『先験的現象学入門』（パリ講演）（同年『デカルト的省察』として出版）

1933年：「ヨーロッパ人間性の危機における哲学」（ウィーン講演）・「ヨーロッパの学の危機と心理学」（プラハ講演）（両講演に手を加えて、1936年に『ヨーロッパの学の危機と先験的現象学』として出版。『危機論文』と略記）

III

ここでは先ず、『論研』1においてフッサールが《カテゴリー》という言葉を使用している文脈から見ておこう。『論研』1に付された題名は「純粹論理学序説」というものである。この題名から、彼のこの時期の研究の照準が《論理学》、それも《純粹》なものに向けられていたことが知られる。つまりこの時期の研究のエレメントは論理学であった。このことを念頭において、彼の記述を追うことにしよう。

第37節で「広義の相対主義の概念」の中でフッサールは、「純粹論理的法則」という概念において彼が考えているのは、「純粹に真理、命題、対象、性質、関係、結合、法則、事実などの諸概念の意味にのみ、すなわち《本質》、《内容》にのみ基づくあらゆるイデア的(ideal)法則である」と言明している。フッサールが《ideal》と言う場合、一面で「観念的」という意味と共に、遠くプラトンのイデアの意味、つまりアプリアリオリな本質としてそれに対応する存在者の実在性の普遍的根拠をなすものという意味、において使用されている。そして「それらの諸法則は純粹に〈学問そのものを、学問の概念に従って、構成する建築用石材(Bausteine) [=素材]の諸カテゴリーであるが故に、あらゆる学問の世襲財産に属する諸概念〉の意味に基づいている」、としている。したがって「論理的主張はすべて、いかなる基礎づけや理論もこの種の諸法則に違反することは許されない」³⁾、違反することは《自分自身を排棄する》ことであると述べている。さらに「その主張が《論理的に背理》である、ということは、その主張の特殊な内容(意味、意義)が〈その内容に属する意義カテゴリー〉が一般に要求していること、それら諸カテゴリーの一般的意義に一般に基づいてい

ること>に矛盾しているということである」⁴⁾とも述べる。そして「第38節 どのような心理主義も相対主義である」においてはフッサールは、「真理と存在はどちらも同じ意味で《カテゴリー》」であり、その意味で相関的であり、したがって「真理の相対化は或る客観的存在を関係点として前提にしている」ゆえに、いかなる《相対主義》も自己矛盾をきたすと断定している⁵⁾。

また「純粹論理学の理念」を提示せんとする第十一章の「第65節 学問ないし理論一般の可能性のイデア的諸条件についての問」の「B 認識内容に関する問」においては、次のように言われる。「意識一般の、特に理論的認識の可能性のイデア的諸条件を問う場合、われわれは最後にはく純粹に認識の内容に、したがってまた、その認識内容が従属するカテゴリー的諸概念に基づき、そして認識主観の作用としての認識をもはや少しも含まぬほどに抽象的な、なんらかの諸法則>へ連れ戻されるのである。そしてまさにこれらの諸法則と、これら諸法則を形成するカテゴリー的諸概念とが、理論一般の可能性の諸条件〔という表現〕のもとに客観的—イデア的な意味で理解されうるものを形成しているのである」⁶⁾。ここにはすでに、フッサールの論理学研究が、カントと同様に、認識批判（理性批判＝経験の解明）のエレメントにまで達することを示唆している。さらに、「第67節 純粹論理学の諸課題。第一に、純粹意義カテゴリー、純粹対象のカテゴリーおよびそれらの法則的複合の確立」の中で、「アприオリな学科の理念」、すなわちカントの言う《アприオリな総合判断》に適合する学科の理念に割り当てられる「課題」を、次の「三つのグループ」に分けることを提案している⁷⁾。

その「第一には、客観的關係における認識の関連、特に理論的関連を《可能にする》比較的重要な諸概念、特にすべての原初的諸概念を確定し、学問的に明晰にすることが肝要である」⁸⁾。この「理論的統一の理念を構成する諸概念」が、彼の言う「意義諸カテゴリー（Bedeutungskategorien）」であり、後出の「（純粹ないしは形式的）対象諸カテゴリー（Gegenständliche Kategorien）」の相関項をなすものである。そしてさらにそれと共に「諸概念とイデア法則的に関連のある諸概念が構成的〔カントの言う《生産的》〕に現われる、とされる。これらの諸概念の働きによって「与えられた理論は与えられた諸命題の演繹的結合」である。そしてこのような「理論に付属する《形式》の理念」が「命題、真理などという諸概念」であり、それらは「このような概念の概念」と言われる。こうした「概念の概念」という《形式》に基づく「基本的結合方式」が、「諸命題の演繹的統一を構成する結合形式」であり、それには「连接的、離接的、仮言的結合」や「主語形式、述語形式、連接的および離接的結合の諸形式、複数形」などが内属している。そしてこれらの結合方式こそが、論理的真理・存在の地平をなすところの「原初的諸概念および諸形式に基づいて導出される諸概念についての総括的（kombinatorisch）概観」を可能にするとされるのである⁹⁾。

これらの概念は「意義諸カテゴリー」に帰属するが、そのカテゴリーと密接に関連して

いるのが「純粋ないし形式的対象的諸カテゴリー」である。その関連をフッサールは「イデア法則的」と呼んでいるが、後者に属する概念として彼が挙げているのは、「対象、事態、単一性 (Einheit)、数多性 (Vielheit)、基数、関係、結合」である。この両カテゴリーの区別は『イデーン』においては、「領域」と「カテゴリー」の区別とも複合して、きわめて複雑なものとなっている。ここでは彼の記述に従ってその理解を追うだけにとどめたい。そこで彼の言い方に戻ると、この両カテゴリーにおいて「どちらの場合にも一貫して問題になっているのは」、「いかなる認識質料の特殊性にも左右されない諸概念」であって、「特殊化されて思考のうちに現われる一切の諸概念や諸対象、諸命題や諸事態などを当然包括する諸概念」である、ということである。なぜなら両カテゴリーは、「可能な思考作用そのもののうちに、あるいはそれら思考作用の中で把握される相関者のうちにそれら自身の具体的基盤を所有」しているからである、とされる¹⁰⁾。

さらにフッサールは「第一の課題」として最後に、「これらすべての諸概念を確定し、それらの《起源》を個々に究明」すること、彼固有の表現として「現象学的起源の問題」を挙げている。この課題は差当り、こうした「問題の諸概念の本質の洞察が問題」であり、また「方法論的な観点では、明確に区別された一義的な語義の確定が問題」であるとされるのである。そして彼は「この目標に到達できるのは十全的イデー化による本質の直観的現前化によってのみ」であると、当面の「純粋論理学」的諸概念の抽出につづく作業の照準を明確に打ち出している。この「十全的イデー化による本質の直観的現前化」 [= 本質直観]こそが、彼の後の《現象学》的作業の中核をなすのである。また彼は、この《現象学》に帰属することとなる次の作業も念頭に入れている。すなわち「複合概念」の取り扱いであるが、その場合には、「それらに内在する基本的諸概念とそれらの結合形式の諸概念との実在性の認識によってである」としている。この「実在性の認識」もまた、現象学に必要な作業となるのである¹¹⁾。

IV

「第68節」における「第二群の諸問題は、あの二クラス [意義と対象] のカテゴリー的諸概念に基づく諸法則、つまりそれら諸概念によって包括される理論的諸統一の複合と変形的改造の可能的諸形式ばかりでなく、むしろ増大する形成諸形式 (die erwachsenden Bildungsformen) の客観的妥当性に関する諸法則の探究に向けられている」。この際「形成」は「構成」と言い換えてもその意味に大差はない。それは、カントがカテゴリーを《経験》成立の視界の中で、すなわち《総合的》=《先験的》視界の中で、つまりは<対象形成>の、フッサールの用語では《構成》の、視界の中で、論究した態度に通底する。このことを念頭において次のフッサールの言葉をきく必要がある。第二群の問題は、「純粋にそれら自身のカテゴリー的形成形式に基づく意義一般の真理ないし誤謬に関係し、他方では—それら意義の対象的相関者に関して—対象一般、事態一般などの存在と非存在に、しかもやはりそれ

ら自身の純粹カテゴリー的形式に基づいて、関係する諸法則の探究に向けられるのである。
 [さらにその諸問題は]その論理的—カテゴリー的であるが故に考えられる限りで最も普遍的な種々の意義および対象一般に關与する¹²⁾。そしてこの第二郡の諸問題は、前記第一群の諸問題と關連づけられて、次のような広がりの中で示される。第一、第二の問題において究明される「カテゴリー的諸理論および諸法則は、それらのイデア的完全性において、すべてを包括する根底を成し、そして特定の各妥当的理論はそこからくそれ自身の形式に属する、それ自身の実在性のイデア的諸根拠を汲み取るのである¹³⁾。

「第69節」では 第三の問題として「可能な種々の理論形式の理論ないしは純粹集合論」の研究可能性が枠づけられる。そして結論としてフッサールは、第一から第三にかけての「これらすべての諸研究が解決されるならば、理論一般の可能性の諸条件に關する学の理念を満足させることになる」としている。そして「この学はそれ自身の領分を越えて、諸理論の本質の種類（諸形式）とそれらに属する種々の關係法則とをアプリアリに取り扱う一つの補足的な学問を指し示して」おり、「このように一切を合一して、理論一般に關するいっそう包括的な学の理念が成立する」としている。こうして彼は次のように独自の学の作業方向を指示する。すなわち「この学はその根本的な部分においては、理論の理念に構成的に属する本質的な諸概念および諸法則を究明し、次いでさらに、この理念を分化して、理念そのものの可能性よりも、むしろアプリアリな可能的諸理論を究明することへと移行する¹⁴⁾と。その作業方向は基本的に、「ある理論的学科の内部で、ないしはその諸理論のある一つの内部で提起された諸問題の解決」へと向けられており、それは「カテゴリー的類型または（同じことではあるが）理論の形式へと還帰する」方向である¹⁵⁾。

V

『論研』2は「現象学と認識論のための諸研究」という総題が付されており、『論研』1で提起された《純粹論理学》構想の具体的遂行のための方向指示が明確になされる。我々はこの巻において彼の《現象学》の誕生の場面に立ち合うことができる。その誕生の場面で重要な役割を果たすのが、《言語》、ここでは《言表》における《表現》(Ausdruck)と《意義》(Bedeutung)および《意味》(Sinn)、さらには《記号》(Zeichen/Symbol)といった概念である。フッサールの現象学的研究の最大の意義は、伝統的な論理学や存在論における中核概念である《カテゴリー》を、こうした《言語》研究のエレメントの中に接合した点にある。そうした意義が最も顕著に読み取れる著作こそ、この『論研』2に他ならない。そこで、この巻に關しては一層丁寧で詳細な理解が不可避となる。

第1節でフッサールは「純粹論理学の認識批判的な準備と解明のための現象学的諸研究の必要性」を説く¹⁶⁾。そこで彼は次のようにその必要性、つまりは研究の動機について述べている。「純粹論理学を数学的諸学科の流儀にならってく素朴な事象妥当性の中で成立する命題体系として完成するだけでは満足せず、さらにそれと共に、これら諸命題について

の哲学的明晰性を、すなわちくそのような命題を形成し、それらを理想的に応用する際に働く、種々の認識様式の本質>とくそれらの認識様式によって本質的に構成される意味付与と客観的妥当性の本質>の洞察、を獲得しようとするものである。……純粋現象学は……直観によって把握され分析されうる諸体験のみを純粋に本質普遍的に研究する。……この純粋現象学は本質直観によって直接的に把握される種々の本質と、純粋にそれらの本質にのみ基づく諸連関を、本質概念と法則的な本質言表とによって記述的に純粋に表現する。このような言表はすべて最もすぐれた語義でのアプリアリな言表である。この領域こそ純粋論理学の認識批判的準備と解明のために徹底的に研究されるべき領域であり、したがって我々の諸研究はこの領域で展開されるであろう」¹⁷⁾。

そしてフッサールは研究の内容に関して、こうした現象学が「純粋論理学の基本的諸概念やイデア的諸法則が《発生》する《諸源泉》を解明する」ものであることを言明し、その理由として、「これらの諸概念や諸法則に、純粋論理学の認識批判的理解に必要な《明晰性と判明性》を与えるためには、当然それらが再びこのような源泉にまで遡って論究されねばならないからである」としている。それは「純粋論理学の認識論的ないし現象学的基礎づけ」と簡単に言えるが、「非常に困難ではあるが、しかしまた重要無比な諸研究を包括している」のである¹⁸⁾。彼は第2節で「それら諸研究の諸目標を明確化」するために次のようにまとめて述べている。「論理的諸理念とそれらによって構成される純粋法則が……与えられているというだけでは到底満足できない。そこで論理的諸理念を、つまり諸概念と諸法則を、認識論的に明晰判明にするという大きな課題が生まれてくるのである。そしてここに現象学的分析が始まるのである」¹⁹⁾と。

VI

フッサールの論理学と現象学の両研究のエレメントが、《言語》の問題を媒介にして最初に滲み合う箇所が、『論研』2の第4節「論理的諸体験の文法的側面をも顧慮する必要性」および第5節「分析的諸研究の主目標の指摘」である。そこで彼は先ず、「言葉が何かを意味することや、一般的に言って、さまざまな言葉がさまざまな意味に刻印を与えること」は周知の事実であり、「もしこの対応関係(コレスポンデンツ)を完全な、しかもアプリアリに与えられた関係と見做すことができ、また特に、本質的な意味カテゴリーにそれらに完全に対応する文法的カテゴリーを提供するような対応関係とも見做しうるとすれば、言語形式の現象学は同時に意味体験の(思考体験や判断体験などの)現象学を包摂することになり、意味分析は文法的分析といわば合致するであろう」²⁰⁾と述べる。

そして「第5節」は、フッサールの初期現象学の核心となる箇所である。そこには将来継続して問題となり続ける重要概念が盛られている。ここでは「純粋論理学的形式論に関する諸理念を解明するための、一連の分析的研究が教示される。これらの研究は意味体験の経験的制約から出発して、《表現する》ないしは《意味する》という非常に多義的な言い

方が本来何を思念しているか、を《表現》について論定しようとするのである」。その論定は次のような多様な問題に照準を向けている。すなわち「ア prioriに表現に属する本質的な諸区別は何であるか、さらに一表現の現象学的側面を優先させれば一体験の本質的記述はどのようになされうか、このような意味作用を行なう資格をア prioriに所有する諸体験はどの純粋な類 (Gattungen) に組み入れられるべきであるか、それら諸体験の内部で行なわれる《表象作用》と《判断作用》は、それらに対応する《直観》とどのような関係にあるか、それらは直観によってどのように《直観化され》、おそらくは《確証され (bekräftigt)》、《充実され》、そしてそれによってそれ自身の《明証》を見出だすのか、といった問題がそれである。そして彼は「これらの問題に関する諸研究は基本概念、すなわち論理学的カテゴリーの解明に関するあらゆる研究に先立たねばならない」としている。さらにまた「《Vorstellung 表象》という名称のもとで論理学の問題となる諸作用ないしはイデア的意味についての根本問題も、これら一連の予備的研究に含まれる」のである。なぜなら「これまで表象という語で総括されてきた多くの諸概念が心理学、認識論および論理学をすっかり混乱させてきた」からであり、「それら諸概念を明晰にし弁別することは一つの重要な課題である」²¹⁾。しかし「そこで問題にされているのは、決して心理学的理論ではなく、認識批判的関心によって限定された表象体験および判断体験の現象学である」²²⁾とフッサールは断定するのである。

そうした意味での現象学において究明されるのは、「表現体験固有の本質内実と同様、さらにそれら表現体験の志向的内実、それらの対象的志向のイデア的意味、すなわち意味の統一性と対象の統一性」であるが、しかし何よりもまず「それら両者の関連が、すなわち、同じ体験が二重の意味で一つの内容をもつとされ、且つまたもちうるのはどのようにしてであるか、体験にはその本来の実的内容の他に、さらにイデア的、志向的内容が内在するとされ、且つまた内在しうるのはどのようにしてであるか」ということである、とされる。そしてこの究明方向には、「論理学的作用の《対象性》および《無対象性 (Gegenstandslosigkeit)》》についての問題、志向的对象と真の対象とを区別する意味についての問題、判断明証の理念との相互関係の中で真理の理念を解明すること、さらにはその他の互いに密接に関連する論理学的カテゴリーとノエシスのカテゴリーを解明することなどが属している」。これら諸研究は、「形式を付与するカテゴリー的諸概念の解明によっておのずから解決される限りにおいて、論理形式の構成に関する諸研究と部分的に同一である」とされるのである²³⁾。

VII

『論研』2の一の第1章は、4・5節で開示された言語の現象学的研究のエレメントが、具体的に諸概念に即して提示される部分である。そこではまず、言語の生きた活動としての《言表》における《表現》と《意味ないし意義》の「本質的区別」が述べられる。その《区別》に関する論述のなかでも重要な意義を持つのが、第11節で示される「イデア的区

別—イデア的統一性としての表現と意味の区別」に関するものである。そこでフッサールは次のように述べている。カテゴリー的直観（ないしは直観的カテゴリー）によってのみ構成され充実される「《可能性》ないし《真理》が欠けている場合」には、「言表の志向は《ただ記号的（*symbolisch*・象徴的）にのみ》遂行されるに過ぎない。すなわちその場合の言表の志向は、直観や直観に基づいて行なわれるカテゴリー的機能によってその認識価値を形成する充実を、汲み取り得ないのである」。その場合その志向には、「《真の》《本来的な》（*eigentlich*）意味が欠けている」²⁴⁾。

こうしてフッサールの現象学的研究は、「志向する意味」と「充実する意味」との間のこの《区別》を詳細に究明することへと向かって行く。その研究は、「<これら互いに共属的なイデア的統一性が、その中で構成される種々の作用>を性格づけ、そして認識のなかでのそれらの諸作用の顕在的な〔注意を向けられた＝意識された＝或るものについての意識〕において生まれる＝志向性における〕《合致》の本質を明らかにする」である。その研究の前提になる彼の基本認識は次のことである。すなわち「すべての言表は、たとえそれが認識機能のうちにあるとなかろうと、（すなわち言表がその志向を、それに対応する直観およびその直観を形成するカテゴリー的作用のなかで充実しようがすまいが、そしてそもそも充実し得ようが得まいが）《思念》（*Meinung*）を有し、しかもその思念のなかで、言表の統一のスペチエス（*Spezies*）〔観念的形象・イメージ：フッサールの場合は、後述のように、《意味》の構成（産出）形態として《純粹意識》の《志向性》の《ノエシス・ノエマ構造》において把握される〕的性格として、意味が構成されるということ」²⁵⁾である。こうして言語の領域に進められたフッサールの作業は、第3章「語義の動揺と意味統一の同一性」において再び総括的な考察へと上昇する。その考察は、第29節における「純粹論理学とイデアの意味」の關係の明確化と「学」の性格づけとして提示される。そこには彼の現象学的研究の全体における《カテゴリー》理解の位置付けが垣間見える。次のように述べられる。「すべての学はその客観的内実から見れば、理論としてのこのような一つの同質的素材から構成されているのであり、学とは諸意味のイデアの複合体である。……学の理論の統一と呼ばれる、このまだ非常に多種多様な意義の組織（*Gewebe von Bedeutungen*）全体自身が、更にその組織のあらゆる成素を包括するカテゴリーに含まれるのであり、そしてその組織自身が意味の統一を構成しているのである」²⁶⁾。

VIII

『論研』2の二は「スペチエスのイデア的単一性と近代の抽象理論」というタイトルが付されている。その第二章では、フッサールの現象学的立場からなされる「普遍者の心理学的実体化」に対する批判が展開される。第10節において、その誤った「実体化」が、次のような「本来的思考」と「非本来的思考」の《区別》についての現象学的認識を欠いているが故に発生することを述べている。やはりそこにもフッサールの《カテゴリー》理解が

浮き上がってくる。彼は言う。「《本来的》思考の諸区別の中で種々のカテゴリー的形式が顕在的に構成されるわけであるが、表現の記号的諸志向もそれらの区別に従っている。本来的な、直観的に充実された仕方ではたぶん決して顕在化されていないものも、すべて、言表したり意味したりする仕方と言われ、また思念されている。この場合の《思考》は《単に記号的 [象徴的]》な思考、あるいは《非本来的》な思考である」²⁷⁾。

また第三章「抽象と注意」は、彼の現象学の最重要概念である《直観》との関係において《カテゴリー》を考察する手がかりを与えてくれる。その第22節「注意の現象学的分析における基本的欠陥」における《抽象》理論は、《カテゴリー》を次のような文脈の中で呈示している。因みに彼の言う、すなわち現象学的意味での、《抽象 (Abstraktion)》は、単に思考活動によるものに限定されず、《本質直観》にも通じる、《理念 (Idee)》を観取する一種のイデー化 (Ideation) の働きとされている。この点で《抽象》や《捨象》を単純に否定的な働きと見做すことは許されない。そうした《抽象》概念は、他ならぬ彼の《(感性的)直観》の理解から発現しているのである。その事情も含めて次の彼の言葉を理解する必要がある。彼は「抽象の場合」を「感性的抽象の領域」を基盤にして、二種類の場合に区別する。「その一方は感性的抽象、すなわち感性的直観に端的に、また事情によっては十全的に適合する抽象の場合であり、他方は非感性的な、あるいはせいぜい部分的に感性的な抽象の場合である。後者の場合には、実現された普遍的意識は、せいぜいその一部分が感性的直観の作用に基づいているだけで、その他の部分は非感性的作用に基づいて形成されているのであり、したがって本性上感性的には充実され得ない思想的 (カテゴリー的) 諸形式 (Formen) に関係している」²⁸⁾。フッサールの《現象学的還元》は、これら二種類の《抽象》を同時に、つまり、思考と直観 (感性) を結合して [カントの《図式論》を参照] 普遍的意識を十全的に実現せんとするものであり、それは端的に言えば《本質を直観する》ことに他ならない。

我々はいつまで『論研』に関わっているわけにはゆかない。フッサールの《カテゴリー》の中心的な記述は『イデー』にある²⁹⁾。しかし『イデー』の思索の中心的動因と素材は『論研』にこそ、その純正な形で保管されているのである。そこで最後にもう一つ、そうした動因を、『論研』全体の成果を視界に入れて述べられている箇所を挙げておこう。その箇所は、『論研』2の二の第四章「抽象と代表像 (Repräsentation)」である。その第24節「思考経済の作為としての普遍的表象」では次のように言われている。その内容は、前記の「感性的抽象」の二種の区別を、より高い、というのは、現象学的により深い、立場から止揚することを標榜するものである。そこには彼の研究姿勢の、カントにも匹敵する重みを感じられる。彼は言う。

「全体を直観する精神は我々にとって常に論理学的理想ではあるが、しかしそれは、我々はその精神に全体直観と共に更に全体知、全体思考および全体認識をも暗黙に付加しているからに過ぎない。こうした考えから我々は、そのような精神をく単なる (たとえ十全的

であるにせよ、思想的に空虚な)精神作用の中でのみ活動するのではなく、自らの諸直観のうちに自らの思惟志向の究極的充実を見出だし、それによって全体認識の理想を実現するような精神>として表象するのである。それゆえ我々は、<単なる直観ではなく、カテゴリー的形式に当てはめられることによって思考に完全に適合するような十全的直観こそ、あるいは逆に言えば、直観から明証を汲み取る思考こそ目標であり、真の認識作用である>と言わねばなるまい。《思考経済》、というよりむしろ認識経済は、思想的認識の領域でのみ意味をもち、更にまたそれ自身の豊かな領域を有しているのである」³⁰⁾。

(未完)

註

- 1) 中島・栗栖著『知の根源へ』西日本法規出版, 1997, 第三部第一章(19・20節)参照
- 2) 同上, 第三部第二章(21・22節)参照
- 3) E. Husserl: Logische Untersuchungen. Erster Band. 4 Aufgabe, Halle, Max Niemeyer, 1928, s. 122
- 4) ibid. s. 123
- 5) ibid. s. 132
- 6) ibid. s. 239
- 7) ibid. s. 243
- 8) ibid. s. 243
- 9) ibid. s. 243
- 10) ibid. s. 244
- 11) ibid. s. 244
- 12) ibid. s. 245
- 13) ibid. s. 246
- 14) ibid. s. 247
- 15) ibid. s. 248
- 16) E. Husserl: Logische Untersuchungen. Zweiter Band, 4 Aufgabe, Halle, Max Niemeyer, 1928. s. 1
- 17) ibid. s. 2
- 18) ibid. s. 3
- 19) ibid. s. 5
- 20) ibid. s. 13
- 21) ibid. s. 15
- 22) ibid. s. 16
- 23) ibid. s. 16
- 24) ibid. s. 44
- 25) ibid. s. 45
- 26) ibid. s. 95
- 27) ibid. s. 131
- 28) ibid. s. 162
- 29) E. Husserl: Ideen zur einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch, Nijhoff, 1950, s. 20-25
- 30) E. Husserl: Logische Untersuchungen. Zweiter Band, s. 168

参考文献

- 1) フッサール『論理的諸研究・1』立松弘孝訳, みすず書房, 1968年
- 2) フッサール『論理的諸研究・2』立松弘孝訳, みすず書房, 1970年
- 3) E. Husserl: Philosophie als strenge Wissenschaft. Klostermann, 1964
- 4) フッサール『厳密な学としての哲学』佐竹哲雄訳, 岩波書店, 1969年
- 5) E. Husserl: Cartesianische Meditationen und pariser Vorträge. Martinus Nijhoff, 1963
- 6) 細谷恒夫編『ブレンターノ・フッサール』(世界の名著・51), 中央公論社, 1970年
- 7) フッサール『現象学の理念』立松弘孝訳, みすず書房, 1965年
- 8) フッサール『イデー I-1』渡辺二郎訳, みすず書房, 1983年
- 9) フッサール『イデー I-2』渡辺二郎訳, みすず書房, 1984年
- 10) フッサール『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳, みすず書房, 1967年
- 11) E. Husserl: Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die Transzendente Phänomenologie. Martinus Nijhoff, 1962

Die Sprache und das Zeichen (Nr. IV)

— Die Entwicklung der neuzeitlichen Kategorienlehre —

Satoshi NAKASHIMA and Teruo KURISU*

Das Fach Sozialinformation,

Fakultät der Informationen von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,

**Aushilfsdozent von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,*

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 6, 1997)

Die neuzeitliche Kategorien-forschung hat mit der 《Kritik der reinen Vernunft》 Kants angefangen. Kant betrachtet die Kategorie (der reine Verstandesbegriff = Notion) als die wesentliche Funktion des 《synthetischen Urteils》, das den Satz auf den den Gegenstand (Objekt) bezieht. Diese Funktion ist die ursprüngliche Leistung, die den Horizont der Gegenständlichkeit produziert. Husserl hat die Kategorienlehre Kants in ihrer ursprünglichen Element übernommen. In dieser Nummer verfolgen wir den frühen Vorgänge seiner 《Phänomenologie》, die die Kategorie im Zusammenhang mit dem 《Ausdruck》 und der 《Bedeutung (dem Sinn)》 der Sprache betrachtet.